

<b>Title</b>	人間の軌跡を追う：チャペル建築予定地の発掘調査から
<b>Author(s)</b>	渡辺, 正人
<b>Citation</b>	キリスト教と諸学：論集, Volume20, 2005.3：68-84
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3224">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3224</a>
<b>Rights</b>	

The logo for SERVE features the word "SERVE" in a serif font. The letter "V" is replaced by a stylized quill pen nib pointing upwards and to the right. The letter "E" is replaced by a square box with a checkmark inside.

聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## 人間の軌跡を追う

——チャペル建設予定地の発掘調査から——

渡辺 正人

はじめに

ある日、この付近に暮らす旧石器人たちが居た。今からおよそ一万年から二万年ほど前のことである。彼らは、ここから少し離れた場所に暮らしていたが、ここは川の合流点で水のみ場もあり、彼らは気に入っており、しばしば訪れていた。訪れるたびに、ここで食料を探したり、石器を作ったりしていた。しかし、石器作りも難しい。あるときはうまく石が割れるが、あるときはうまく割れない。遠くの川原で少し形を整えた石を作り、ここに持ってきて最終の作業を試みるが、うまくいかず投げ出すことも多い。そんなことが数回も続いたのだろうか、旧石器人たちはキャンプを移し、それからこの地を訪れることはなかった。

その後、数千年の長い年月が経て、再びこの地に人が暮らし始めた。縄文時代早期の人々である。彼らもキャンプに近い生活を送っていたが、ここにはベースキャンプを置いて、この辺に少し長く滞在していた。しかし、彼らも、やがてキャンプを移し、この地を訪れなかった。

次に人々がこの地を選んだのは、それから数百年経った頃である。しかし、あまり長くは住まなかった。

次はさらに二千年くらい後のことである。今度は何家族もの人々が数十年にわたって多少場所を変えながらもこの付近一帯で暮らし続けていた。当時のこのあたりは木の実や山菜なども豊富であつたらうか。人々はここで野山から食料を得、狩をして鹿や猪を獲っては皮をなめして衣服などに用いていた。この近辺を移動し、居を変えながらもそれなりに安定した暮らしぶりであつた。しかし、やがて彼らもここから移つていった。

次に人々がやつてくるのは、再び七、八千年も後のことである。その間、人が近辺に住んだ形跡はあるが、この地を選んだのはそれほど後のことである。古墳時代になつてからことであるが、それもこの近くに住んだのであつて、この地に居が構えられたわけではないのだが、おそらくはムラの一郭であつたのではないか。

次に江戸時代も終わり頃に、家が建てられ、人々が暮らした。この近くを小径が通り、鴨川を越す渡り場へと通じていた。人々の往来が見られた。その後、明治になつて家は廃絶し、道だけが残り、この地は畑になつた。

最後にやつてきたのは、大学であつた。風がよく通る丘の上に、人々が往来した道の上に、何度も人が住み語らつた丘の上に、学び舎が建てられた。

### 一、発掘調査の経緯

冒頭に掲げたのは、この地の歴史を発掘調査の結果から、想像して復原して走馬灯のようにみたものである。なぜ、こんな想像が可能なのか、ということは後に述べるとして、本稿では発掘調査の概要とその成果をどのように読みとるか、ということを中心にしてゆきたい。

さて、筆者は今回、聖学院大学のチャペル・講堂建築予定地に所在する遺跡の発掘調査の担当を急遽仰せつかった。細かい経緯はともかく、こうした発掘調査は所屬する自治体によって行われるのが通例であつて、大学とはいへ、考古学科を持たない大学にその任がめぐってくるのはそう多いことではない。長らく地元旧大宮市で発掘調査に携わつていた実績を汲んでくれたのだが、特別研究期間にあつた私としては複雑な思いではある。だが、まずは望外といえる。勤務校の精神的支柱であるチャペル・講堂、特に短大に在籍していた教員としては悲願であつたその完成に少しなりとも寄与できたことを感謝したい。

ところで、少し記録的にデータを記しておこう。発掘調査については二〇〇三年四月一日に阿久戸学長から正式に依頼を受けた。まさにエイプリルフルであつたが、夕方だったのでさすがに嘘ではないと思つたものである。その翌日から、上尾市教育委員会文化財課の協力を得ながら、昔の様々なつてをたどつたりして準備をさつそく開始した。四月一〇日より、種々の準備と並行しながら発掘調査現場の上面の土を機械で剥ぎ取る作業に着手し、順次測量杭による調査区の設定が進む。先行準備がほぼ整い、四月二三日に本格的に調査を開始するはこびとなる。ちなみに驚異的な準備期間の短さであるが、上尾市教育委員会ほかのおかげである。特に記して感謝したい。以後、縄文時代の調査を主に進み、後半は旧石器の調査が主となる。この間を詳しくは記さないが、数字だけを以下に記しておく。

### 検出した遺構および遺物

#### ①旧石器時代の石器製作跡 ニブロック

- ② 縄文時代早期中ごろの生活跡（土器・石器）
- ③ 縄文時代早期後半の生活跡（土器・石器）
- ④ 縄文時代中期後半の生活跡と住居跡二〜三軒・土坑群（土器・石器）
- ⑤ 縄文時代後期前半の生活跡（土器・石器）
- ⑥ 古墳時代の生活跡（土器）
- ⑦ 江戸時代の生活跡（溝跡・掘立柱跡・茶碗片など）

これらを調査しているうちにはたくさんのお出来事があった。久しぶりの発掘調査を行ってどんなに体がなまっていたのかを思い知った。見学者もあり、自分の大学の地下にこのような遺跡があったことに驚き、遺跡のあった場所は立地の良い所だと説明すると、今までこの大学が田舎のあまり良い場所には無いようにイメージしていた方も、これで見直してくれるのがうれしかった。

そうこうしているうちに六月五日に現場での調査を終了する。調査日は外作業で二七日ほどであった（雨天時学生のみなど含まず）。後半、やや雨にたたられたが、予定通り進み、作業を終えられたのは幸いだった。その後は機材の撤収と後片付けなどである。こうして発掘調査は終了し、直ぐに整理作業にかかったが、それはまたいつか報告したい。

さて、遺跡というものは、ただ単にそこにある、というものではない。人の歴史の痕跡であるので、そこには自ずとある「つながり」というものがある。それは、時間や空間など、さまざまな要因の上に成り立っているもので

ある。

まずは自然環境から考えてみるが、大学の立地する台地は、「大宮台地」と呼ばれ、北は現在の鴻巣市、南は川口市にいたる南北に伸びる細長い台地である。その西側は荒川流域、東側は利根川流域にはさまれており、台地内にもそれらの支流が入り込み、樹枝状に浸食が進んでいる。遺跡は、時代や性格によっても異なるが、大体台地の縁辺部に位置することが多い。そのためにこの大宮台地には遺跡が多い。たとえば上尾市内には、登録されている遺跡だけで四〇〇を軽く超える。このほか、未確認の遺跡もあるので、かなりの数があるといえる。

大学の脇の鴨川は、桶川市に源を発し、現在のさいたま市水判土で荒川の支流の入間川に合流するが、この川の両側の台地上は遺跡が多いことでも知られている。ことに川越線から南あたりには多くの時代の遺跡がある。水判土より南の自然堤防上（埼玉大学周辺まで）には奈良時代以降には条里制がしかれ、整備された田圃が広がっていたと考えられている。

本大学は、その鴨川の西側の台地上にあるが、ここはさらに浅間川との合流地点にあたり、細長い形状から「舌状台地」と呼ばれる。こうした水辺に突き出た台地上には遺跡が多く、この地もその例に漏れず時代の複合した多面的な性格を有しているのが特徴である。両側を川に囲まれて、水の確保や食料の調達に役立ったからであろう。

近隣にも遺跡は多く、同じ上尾市内には瀬戸内海一帯で作成される形式の石器とよく似た形式の石器が出土しており、旧石器時代の論争のひとつにもなっている殿山遺跡がある。また、大学の南2kmほど（現在の17号バイパス宮前ジャンクション付近）には西大宮バイパス遺跡があり、旧石器時代、縄文時代早期の遺跡として知られている。

その他にも大学周辺は遺跡が多く、昔から人が住むのに適した環境であったといえる。時代によって、人が暮ら

すのに適する、適しないということはあるかもしれないが（たとえば、交通や買物物の利便など）、その地が持っている景観や地理的環境といったものはそうそう変わるものではない。低地の水はけの悪い地は、昔も今も暮らし難いわけだし、台地の上の日当たりの良い快適な地は昔も今もその通りである。故に、かつてはいつも口癖のように「遺跡のある場所はいい場所なんですよ。まだ人が少なく、どこでも場所を選べるのに、なぜその場所を選んだか、それには選ばれるだけの理由があるからです」と言っていたが、それはそのままこの地にも当てはまるのである。

## 二、発掘調査の成果から

今回の発掘調査の結果は先に記したとおり、時期的には七つの時期に人の生活の痕跡が色濃いことが分かった。学問的な成果としては、①では前回調査の旧石器を補強する内容のものが出土したこと、③では鶺鴒ヶ島台と呼ばれる形式の土器が出土したこと（この形式は神奈川から千葉にかけての沿岸部を中心に分布し、内陸部ではそれほど多くの出土例を見ない）、という二つがやや注目すべき内容であろうか。

特に①について少し詳しく触れておこう。

まず、あまり考古学に興味のない方のために用語の説明もしていかななくてはいけないが、ご存知の通り旧石器時代にはまだ土器は無く、石器だけが使用される。むしろ、木製品や木の皮や蔦や蔓などをつかった道具はあったと思うが、腐って残っていないので今それを知ることが出来ない。つまり、旧石器時代の生活や、人々の行動の痕跡を探るには石器やそれを作ったときが一番分かりやすいのである。また、当時は移動を主とした遊動生活を送って

いたため、キャンプをした際の焚き火跡なども重要な痕跡となる。今回、検出したのはその石器を作った跡である。具体的には石の破片が散らばっているだけだが、そのまわりをブロックと呼ぶ。人間の行動から考えれば、人間が居て、その人が石を割って破片が周りに飛び散るので、このブロックを分析することで、そこで何がどのように行われたのかを類推することが出来るのである。

では、今回のブロックの状況を分析するとどのようなことが分かるだろうか。特徴を挙げてみると、

1、ブロックA（仮）と呼ぶ南側のブロックの破片の点数は一〇七点、ブロックB（仮）と呼ぶ北側の破片は三〇〇点ほどである。

2、ブロックAは、石器を作るときの石器本体を取り出す作業が行われていたが、ブロックBでは細かい数ミリの破片が大半で、石器の調整や最終加工段階が行われた可能性が高い。

3、原石だけではなく、半加工品も持ち込まれている。しかも、半加工品の割合が高い。

4、製品も出土しているが、石の質が異なっており、ここで作られた、とは言い切れない。

5、前回調査を含めて三ブロックの石器製作跡が検出されているが、各ブロックの作業内容はかなり異なる。また、石材もあまり重ならない。

6、ただし技法は共通しているので、同一文化を有していると考えられる。

7、出土層位も基本的には同じである。

8、礫群・炭化物などの痕跡は何れからも検出されなかった。

ということになる。これをもう少し分かりやすく説明すると、1と2では、点数とその破片の特徴を扱っているが、早い話が石器製作の段階を反映している、ということである。通例、石器の製作は

①粗割↓②石核（石器を作る破片を効率的に作るための母石）↓③破片（剥片という）↓④調整↓⑤製品

という段階となるのだが、一つのブロックでこれが全部行われる場合と、②あたりから始まって⑤まで、とか、③から⑤までとか、さまざまな行為が行われる。本遺跡の場合は、おそらくブロックAは②↓③だけが行われ、ブロックBでは④↓⑤だけが行われたのではないかと思われる。

なぜそう言えるかというと、飛び散っている破片の大きさや形状による。ブロックAでは、やや大型の剥片と、それがくつついていた母石である石核が出土している。これによって①の段階はどこかで行って、石器を作る破片をとり易く加工した後に持ち歩いて、ここに来たということが分かる。ところがその本体である石核が二個も検出されているということは、その石核が結局は破片を採るのにふさわしくはなく、早い話が使い物にならないので途中であきらめて捨てた、ということである。ということは、その石核からは最終的に石器が作り出されたとは想定しがたい。また、最終的に製品に加工するときに出るはずの細かい破片もほとんど出ていない。こうして、石核が出土し、破片が大きめであり、しかも最終的な調整の破片が出ていない、という状況から②↓③だけが行われたと想定できるのである。

逆に、ブロックBでは、こうした石核が出土しておらず、むしろ破片のほとんどは細かな調整の際に出てくる破片である。ということ④↓⑤の工程が想像できる。

では、ブロックAとBの関係は、連続するのかもしれない、ここで出土した石の質が異なっていることが問題である。ブロックAとBの石の質が同じであれば、ブロックAで一旦整形をしておき、ブロックBへ移動して最終調整

をした、と考えることも出来ようが、石の質が異なっている以上、そうした連続性は認められない。つまり、同時に二人の作業が行われたか、あるいは同一人物でも時間差があるのか、ということになるのである。

ここで、ちょっと触れておかねばならないことがある。それは考古学の基本の考え方で「形式による編年」という時間の把握の仕方があることだ。同じように土の中から出てくる遺物であつても、それが何時の時代のものかを判断する必要があるが、考古学ではそれを「形式」という概念で行つてゐる。たとえば、自動車を例にとつて見ると、自動車は毎年、あるいは数年に一度モデルチェンジをする。そのために街頭を写真などに撮つてみれば、写つてゐる車種によつてその写真の撮影年代が分かるだろう。現実には古いモデルも新しいモデルも一緒に走つてゐることが多いが、土器や石器の場合、ある時期になるといつせいに交代・変化してゆくので、ある地域の中では常にひとつのモデルしか写つてゐない、という状況に近い。そのためにそのモデルを並べてゆけば、必然的に時代順に並んでいく、ということになるのである。石器や土器の場合、いつの時代でも、一人一人が勝手に作つてゆくのではなく、時代と地域に共通した技法を持つてゐるのである。つまりほとんど同じ手順をふみ、文様などでも基本のパターンは同じで誰が作つても同一なのである。いわば個性というものが無いので、ある時代のある地域には規格品に近いものが流通してゐるということになる。それらの技法を受け継ぎ、思想や感覚を共有しているので、「同一の文化集団」と言つても良い。今でも「関西的」「関東的」な発想や感覚というものがあるが、それがもつと強固に現れてゐる。人間の歴史は、そうした共有感覚を次第に分化させ、個性化させてゆくことの歴史であると言つてもよいかもしれない。

ここで、ここで出土した旧石器の問題に戻れば、この前回調査も合わせた三ブロックでのそうした製作技法はともよく似ており、おそらくは同じ人間か、少なくとも同じ文化集団に属している者が製作したと見てよい。その

ためにこの三ブロックにはあまり大きな時間差は想定しにくいのである。

また、状況証拠であるが、上記の項目8もそれを助ける。8の意味は、簡単に言えばそこが本拠地やキャンプ地ではなかった、ということである。定住ではなく、遊動生活をしている旧石器人ではあるが、ベースキャンプや、出先でもキャンプしてある程度そこに滞在するということは行っている。特に石材を交換したりして手に入れねばいけなかっただろうから、人々の定期的な交流も想定しなければいけない。たとえばこの付近でも今の茨城県大洗海岸産の安山岩や長野県和田峠付近の黒曜石などが出土しているが、ここからそれぞれへ採りに行ったというよりは、リレー式に人手を介して流通するとみたほうが良い。こうした場合、「出会う」必要が生じるから、当然ベースキャンプのようなものも想定することが出来るだろう。

こうしたベースキャンプや簡単なキャンプにしても、人が生活していれば当然その痕跡は残る。暖をとったり、食事を作ったりしなければいけないので、焚き火をたく。焚き火をすれば、火によつてこのあたりのローム層の地面はレンガのように硬く赤化する。また、炭が周囲に飛び散る。こうした痕跡があること、また濃密であることがキャンプの存在やその期間の長さを証明することになる。本遺跡の場合は、こうした痕跡がまったく検出されなかったので、人がある程度の期間滞在したとは考えにくい。むしろ、短時間の石器製作だけにここに居た可能性が高い。

やや煩雑になったが、以上のことから類推できるのは、この三ブロックは、キャンプのように滞在した場所ではなく、石器製作のみの行為が行われた場所だということ、製作の技法から見ると大きな時間差を想定できないことが理解できよう。

さて、ではこの三つのブロックに関係した人々は、はたして何人だったのか、というのが次の問題になるのだが、実はこれが難しい。技法が似ているということは、個性から人数を想定するということができない、ということだからである。しかも、三つのブロックがおよそ五〇mほど離れてそれぞれあるということも複雑にする。作業内容や石の質が異なるので、三人、と考えるのが単純な線だが、同時に三人が作業をしたのであれば、なぜそんなに離れていなければならなかったのかが分からないからである。他の多くの旧石器の遺跡では、このブロックの分布状況がわかることも多いが、ある程度隣接していることが多い。キャンプをしたとしても、やはりある程度固まつて行動するのが常だからである。となると一名が数回ここを訪れる、という想像だつて成り立つだろう。結局この点に関しては、結論を出すことが出来ない。

これらの特徴をもとに、当時の状況を再現して記すと、次のようになる。あくまでも筆者の創作ではあるが、上記の分析に基づき旧石器人の行動を理解するためには必要なシュミレーションなのである。

#### 〈創作1〉

ある日、この地に三人くらいの旧石器人たち一行が遠くからやってきた。ここまでやってくると、その先は川の合流点で、向こう岸へは渡れない。断崖は十数メートルもの高さがあり、台地の両側をはさんでいる。戻らなければならぬようだ。そこで湧き水を飲んで一休みして、次の狩に必要な道具を整えてから出発しようということになり、持っていた石を取り出し、石器を作り始めた。一行のうち、三人ほどが五〇mくらいの間隔を思い思いに座り、石器を作り始めたが、二人目はうまく石が割れず、途中であきらめた。一人目と三人目は石器を作り、または

もう少し、というところまで仕上げた。だが、もうすぐ日も暮れるし、寝るのにふさわしい場所もこの辺にはないので、石器は全部作れなかったが出かけることにした。旧石器人たちは、ここを立ち去った。

〈創作2〉

ある日、この付近にキャンプを構えた旧石器人たちが居た。そのうちの一人の男がここを気に入っており、しばしば訪れていた。訪れるたびに、ここで食料を探したり、石器を作ったりしていた。しかし、石器作りも難しい。あるときはうまく石が割れるが、あるときはうまく割れない。遠くの川原で少し形を整えた石を作り、ここに持ってきて最終の作業を試みるが、うまくいかず投げ出すことも多い。そんなことが数回も続いたのだろうか、旧石器人たちはキャンプを移し、それからこの地を訪れることはなかった。

創作1は同時に複数の人がやってきたということ、創作2はある一人の旧石器人が複数回ここを訪れた、ということがポイントである。一読して、いずれにも無理があるのは明確だろう。創作1では、三人がなぜ離れて座ったか、という点がやはり謎である。創作2のほうが無理が無いように思うが、では再三ここを訪れられるようなベースキャンプの存在が付近では不明である。しかし、一人が複数回訪れる、ということの方が、石材の重なり具合などから考えてみても説明がしやすいことから、冒頭ではこの2を基に話を作ってみている。

結局、こうした想像は、いわゆる「学問」という枠からは外れるかもしれない。不確かなものを抱え過ぎており、あくまでも「想像」の域を出ないからだ。しかし、〈考古学〉とは、土中に埋もれた先人の生活・活動の痕跡を調査し、その行動や文化を明らかにして、復元してゆく学問である。それは、「生活」という人間の行為のシステムの総

体がそこで行われ、それが断片的にであつても残っているわけで、その総体を復原しようということを目的にしている。ただの事実の羅列がその目的になつていとも思えず、あえて仮説の一つとして提示することも必要だろ  
うと思う。そのための検証作業の一過程とご了解いただきたい。

### 三、「手」とは何か——(人間)をめぐって——

本章は、発表当日、あまり時間がなく簡略に済ませたところである。ここで、詳しく、とも思わないでもないのだが、全体にまとまりがなくなる恐れから、本稿でも本遺跡に関わりそうな部分のみを抄録しておく。ご理解をいただきたい。

さて、皆さんは「石器を作る」ということをどのようなイメージで捉えているだろうか。石器を使う、ということから、おそらくは素直に「原始人」といつたイメージが出てくる割合が高いのではないだろうか。現代人よりも能力的には劣つたようなイメージはないだろうか？

しかし、論者も石器を作ることを行うが、実はこれが難しいのである。自然によつて作られた不均質な素材である「石」を、石器を作るといふある明確な「意志」をもつて思い描く形に仕上げてゆくことは並大抵のことではない。

石器を作る際に、基本となる考えがいくつかある。たとえば、石に与えられた衝撃は、物理の法則により円錐形に伝わる。また、割られる石と割る道具との硬度の関係により割れ方も異なつてくるし、力の入れ方によつても異

なる。無論、割られる石の石質にも特徴がある。

そうした「割れ方に対する理解」「割り方に対する理解」「割る道具に対する理解」といった複合的な思考と、それをコントロールする筋肉の動きが重要なのである。

それゆえに、石器を作る技術の進展は、そのまま人間への道程だといってもよい。人類の歴史は約四〇〇万年といわれるが、石器の歴史（二五〇〜二六〇万年前開始）はその大半が重なっている。

霊長類を研究している島泰三氏は、1、二足歩行が可能なサル類の中から人間だけが常時二足歩行になったのは食物の獲得のためだったとする。当時の人間は、死肉や骨の髄などを主食にするため、骨を小さく砕く必要があった。そのためには石や石器が必要で、それを握り締めるために親指が発達し、その石や石器を常時携帯するために二足歩行で常時歩くようになった、と説明している<sup>※</sup>。

また、旧石器の研究家の竹岡俊樹氏は、2、石器を作るためには左右の手の連携とイメージの重要性を指摘している。つまり、石器を作るといふことは立体的なイメージを、左右の手（つまり左右の脳）の分業と情報交換、操作という動きの中で実現していく行為<sup>※</sup>であるとしている。

実際、石器を作成してみると、ある不要な部分を取り除くために、数段階の予備操作を経てようやくその部分の取り除きにかかれるということが多い。その角度を調節してゆくためである。つまり、「こうするためには、まずここをこうして、次にこの角度にしてから」といった数段階をあらかじめ想定できないといけないのである。しかも、必ずしも思うとおりに割れるとも限らないから、失敗すればその修正を含めて、新たに工程を立て直す、という複雑的な思考も要求されてくるのである。単に石を割ってゆけば、石器が出来る、といった単純な作業ではないことを思い知るべきであろう。

こうした人類の進歩の道程を、個人の心身の発達になぞらえればネアンデルタール人などの旧人では、帰納法的な思考はすでに成長しており、やがて演繹的な思考法も見られ始めてくるという。人間で言えば一〜一四歳程度とされる。クロマニヨン人のような新人では十代後半の発達のレベルという<sup>ま</sup>。

さて、こうして石器の製作、という問題は、人間の知能や運動能力の発達と密接な関係があることが分かった。その主なる担い手はまさに「手」である。立体的なイメージを実現するために、「手」のコントロールを学ぶでいくことこそ「人間」への道程であった。その意味で「手」は「人間」そのものの比喩にほかならない。今、言葉を使つたように「担い手」「受け手」「働き手」「選手」その他、多くの言葉が意味する「手」は、我々の二本の「手」ではなく「人間存在」そのものを表す「手」である。

その他、「手」の関わる行為にも、人間の内面に関わることが多い。たとえば「心を掴む」といった場合は、「手」の持つ「握る」という動作が比喩となつている。人間にとつて「手」というものがどのような位置にあるか、これらの言葉は如実に表しているのだといえよう。

以上のような、簡単な事柄からでも、石器を作る、ということが人間にとつて様々な関わりをもっているのだということがわかるだろう。考古学の範疇を少し超えるかもしれないが、考古学が明らかにする「人間」の姿として見ることが出来るのである。

## 最後に

発掘調査というのは因果な行為であると言われる。貴重な埋蔵文化財を記録保存するとはいっても、それは同時に記録保存がすめば工事の許可が出て、遺跡が壊されることを意味しているからだ。その罪滅ぼしといっては何なのだが、こうして得られた貴重な地域の歴史を利用して、さらに少しずつ解明してゆくことと、そして地元に戻元することが使命でもある。

今回の調査では、冒頭に述べたように、この大学が建っている場所があまり良くないイメージをもたれていたようであるが、それが良いイメージに変わったなどといったことがあり、いくらかでも寄与できたのに胸をなでおろしている。ちなみに良くないイメージを抱かれるには理由があり、かつて本館より南側は低地で、台風や大雨の際には水があふれ、休講もやむなしといったことがたびたびあったからだろう。それはかつてのふたつの川の合流点に埋まって出来た低地であるから、当然といえば当然である。しかし、今回、チャペル・講堂が建てられる場所はここで記したような良い場所である。改めて記しておきたい。

また、この文章は、今回の発掘調査の成果の分析に基づいて書かれてはいるが、現在も整理が進んでいる最中であり、あくまでも現時点での内容であることを改めて明記しておきたい。キリスト教センターから発表、原稿化の依頼を受けたとき、本報告がでてしまうと創作部分のような自由な想像が出来なくなってしまうので、早めのほうがよいと答えたが、少し口が滑ったような部分もあった。とはいえ、今しか書けないことでもあり、原稿化に当たってはあえて大言壮語を残したままにしてある。ご寛恕願いたい。

最後になるが、調査に当たっては大学・法人関係者および上尾市教育委員会教育総務部生涯学習課のみなさん、近隣の皆さんにはお世話になった。記して感謝したい。

注1 島泰三『親指はなぜ太いのか 直立二足歩行の起源に迫る』中公新書、二〇〇三年

注2 竹岡俊樹「旧石器時代の石器分析から見た左右差の起源と発展」(『左右差の起源と脳』朝倉書店、一九九一年、所収)

注3 上野佳也「先史人の心を求めて」(『心のなかの宇宙』日本の古代13、大林太良編、中央公論社、一九八七年、所収)  
(本稿は二〇〇四年五月二十六日に行われた「キリスト教と諸学の会」において同名で発表したものをまとめたものである。)